
湖面月 ~裏切りの黒、信頼の白~

雨月

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

湖面月 ～裏切りの黒、信頼の白～

【ノード】

N2569E

【作者名】

雨月

【あらすじ】

まだ、幼かった頃、彼は双子に裏切られた。その後、引っ越しして彼の心も一段落ついたのだが……甘かった。裏切りと信頼、そんなお話。

プロローグ（前書き）

え～この小説は……まだ、許可取つてないんで作者名を出していいのかわからんので伏せさせていただきますが、とある作者様から原案をいただきて兩月が書いたものです。え～シリアルスコメディーという矛盾したようなジャンルですが、これからもどうかよろしくお願いします。

プロローグ

プロローグ

今日は僕の誕生日だ！今年から小学校一年生になつて、とても小学校が楽しく感じられている。

これからもこんな楽しい日々が過ぎていくんだらう……

子どもの俺は当時、お隣に住んでいた双子の女の子と一緒に帰っている…………帰るな、そこにはお前が待つていてる楽しい日々は待つていない。

隣で笑っている女の子たちは僕のお誕生日をほめてくれている。この一人、これからもずっと僕と一緒に学校に会ってくれるといった。

人は裏切る…………そんなことはおまえ自身がよくわかっているはずだ。人を信用するなとは言わないが、そいつらは絶対に許すな、信用するな。

「ただいま！」

僕は玄関の戸を開け、元気よくただいまと家にいるであろうお父さんとお母さんに挨拶をする。元気がないと男の子はいけないのでお父さんは言つていた。

俺は田をそらすことにした。そう、この後に待つてるのは楽しいことなんかじゃない。今の俺…………かがりたつや篝辰也に出来ることはあの頃の俺、水守辰也が息を飲む声を聞くことしか術がなかつた。

……は、俺の夢の中の世界だ。どうしようもない、ただの空虚な

る場所なのだ。

俺の年齢が今、十七歳…………あれから十年前が今の時間だ。次の新聞には『幸せの家族、崩壊！何が起こったのか！』という見出しで飾つたものだ。その記事の中身は簡単にいうなら次のように書いてあつた。幸せな家族、その父親が母親を刃物で殺害。その後、自殺。残された少年は…………

ま、こんなところだ。

俺はそのままその家から学校も通つていたのだが、噂というものは怖いもので、俺は『不幸な子』から気がつけば『不幸を呼ぶ少年』という異名を手に入れてしまつていたわけだ。俺の身の振られ方が親族の方々に決定されるまでいつもの通りの生活を送るしかなかつた。

不幸を呼ぶ少年の日々は少年の心を壊すまでにそう時間を要しなかつた。

まず、双子の少女はその少年を汚物でも見るかのような視線を送り始めた。もしかしたら両親よりも信じていたかもしれないというのに、この二人は見事にその少年の心を粉々に砕いてくれた。助けは求めた、それが受け入れることはなかつた…………裏切り、そんな言葉をそのときの俺は言葉よりも先に心で知つてしまつたというわけだ。

それを知つてしまつた俺は空虚な生活を送ることなく、憎しみだけで生きることとなつた。

親族たちは遺産目当てで俺を引き取るといつてていたのだが、親戚の中で最高権力を持つ少年の母方の両親が引き取ることとなつたのだ。

ばーちゃんとじーちゃんは煮ても焼いても喰えないような人だつた。

「…………僕を引き取つたら不幸になるよ」

一人になりたかった、もう一度、お父さんとお母さんに会いたか

つた俺はそういうた。

「ほお、不幸？不幸といつものほんたの面のことをおいつじやないのかい？ガキはガキらしく、遊んでおいで」

「友達がほしいんじやろ？ほら、この子もお前さんと遊びたがつておるのじやよ」

ばーちゃんとじーちゃんはそいつで俺に友達を紹介してくれた。遠い親戚らしく、その子の名前は篳玉藻かぎりたまもという子だった。

そして、その子のおかげ、祖父母のおかげで…………壊れていた心は戻った。あの日にも踏ん切りはついた、俺の世界は…………あの頃に比べたらまだ、暗かつたが一般人と変わりない程度まで明るくなつた。今の俺と満員電車のサラリーマンとを比べたら俺のほうが幸せに違いない。

高校一年の俺はばーちゃんとじーちゃんが経営しているアパートの一室を借りた。高校になつて心の友とよべる一人の友達が出来た。性格はくせがあつて変な奴だが、いいやつらだ。

しかし、世界は笑えないように出来ていてるらしいと気がついたのは夏休みももう終わるというある日のことだった。

第一話・楽しみの後、苦しみの邊（前書き）

更新するのが遅くなりました。言い訳を開始すると結構時間がたつてしましますので……すいません、気にしないで下さい。さて、今回から本格的に始まる予定です。もつとも、この小説はシリアル的な要素が多く（勿論、コメディー要素も含んでいますが）人間の黒い部分なんかもあるかもしれません。まあ、よろしければこれらもお付き合いお願いしたいと思います。

第一話・楽しみの後、苦しみの前

一、

裏切られた心、崩れた心、沈んだ心、落ちた心……あなたはありますか、そんなことが？

恨みますか、憎みますか、そのきつかけを作った相手を。彼は忘れています、その一人を……

「……あ～おわんね～」

一メートル近くの身長に岩山のような体躯を持つ男がぱたりと倒れる。それだけで俺の部屋はゆれたかのように思われた。この男、名前を工藤大策くどうだいさくといふ。茶髪で不良な男でもあるのだ。

「揺らすな、こちらの実験に支障をきたす」

その隣では白衣の男が眼鏡の端を抑えて、そんなことを言つ。その手に持つてゐるフラスコから不思議な煙が出てゐる。白衣の男、名前を渡辺徹わたなべとおるといふ。秀才だが頭のねじが一個足りないと俺は思つてゐる。

「お前ら、勝手に人の家に上がりこんで好き勝手するんじゃねえよ！」

！」

「そろそろ脛きのう」はんだ……そんな時間にこの一人組みはやつてしまつたのだ。迷惑だ、マジで。

げんなりとした顔で二人組みを見ていると工藤大策はとても心外そうな顔をした。

「おいおい、兄弟……俺は転がり込んだんだぜ？」

その隣で普段は工藤大策と仲が悪い渡辺徹がうつむと頷く。

「私は開脚前転で侵入したがな」

「今、侵入したって言つたろ？認めたな、徹？」

「こほん、言葉の綾だ、気にするな」

そういうて再び実験を始める。煙が先ほどより増えてきてゐるし、

異臭までしてゐるぞ、この二流研究者！

ねじの外れた天才だか馬鹿なんだかよくわからん奴は放つておいてもう一人の馬鹿を見る。

「大策、さつさと宿題を終わらせや」

「無茶言つなよ……俺にとつてはこの問題を解くことに對して快感を感じたいのだ」

たまらんという面をしながらそのじつつい手で鉛筆を握つてゐる。こいつは変態か？この一体を脅かしている『轟傑の拳』とは思えん発言だ。鉛筆が悲鳴を上げてゐるし……大丈夫なんだろうな、その鉛筆は俺の鉛筆だぞ。

「解くつてよお……となりにある宿題は完璧に徹のものだらうがよ？」

「氣にするな、これは等価交換という奴だ。どつかの兄弟もそれがすべてだつていつてゐた氣がする」

「いや、俺の部屋ですることはないんぢやないのか？」

しようがないなあと黙つてどつかのロボットが駄目な住人に道具を提供するときの声を奴はしゃべつた。

「いも～とのしゃしん～！！！」

ごつい兄貴に対して、妹は可憐だ……その手にはバスタオルを巻いてゐる工藤大策の妹、民子ちゃんの写真が握られてゐる。

「……等価交換だ。民子を揃んで俺たちの昼食まで作つてくれ」

「う、う～む……これは非常にいい交換条件だな……」

「悩むな……」

「珍しいな、お前がそこまで悩む姿を見たのは工口本を買おうとして年齢偽装がばれそうになつたとき以来だな」

「つるせえよ……」

それまで黙つていた渡辺徹が口を開く。

「今日はこの部屋の隣に引っ越してくる人がいるのだ。辰也の祖父母は辰也と同世代の引っ越してくる一人にこの町を案内するようになつてゐるのだよ。つまり、我々一人がいたら邪魔になると思うの

る。馬にけられてしまふかも知れないからね」

口を開くと毎回毎回ひくでもないことばっかり言つた、こいつは

「けど、そいつらが男かもしれないだろ?」

工藤大策がもつともなことを言つた。そうだな、俺も知らされていないからよくわからんな……

「いいや、この前隣の部屋を下見に来ていた一人の女の子がいたからな……間違いないだろ?」大策、宿題は僕の部屋で見るといい

渡辺徹は珍しく、立ち上がった。いつもは頑として立ち上がった

り、何かをしないような奴なのだが……どうしたんだろうか?

「おい、変なものでも食つたのか?」

「おじおい、心から君の事を考えてあげている親友にそんなことをいうのかい?」

心外だとばかりに肩をすくめる。

「いや、俺もそう思つぞ? どっちかといつと足引っ張るのが好きだろ、お前?」

大策もそんなことを言つて俺を加勢してくれる。

「足を引っ張るか……足を引っ張つてくれているのは毎回、君だろ?」

三人で法に触れそうなことをするとき、確かに失敗する確率が高いのは工藤大策に他ならない。

「まあ、明日雨でも降るかもしれないが……ありがとうな、徹

「じゃあな、徹」

「……ほら、君も帰るんだよ」

居座りうとした工藤大策を引つ張つていき、この部屋に静寂が訪れた。あの一人がいないだけでここまで静かになるんだな、この部屋は。

早めの朝食をとり、お隣さんが来るのを待つ。

ぴんぽん！！

どつかが壊れているような音がして、チャイムが鳴った。

「はーい」

立ち上がつて玄関に手をかけて……開けた。

そこにいたのは双子だった。

ああ、お隣さんは双子さんなのか。俺はただ、それだけおもつた。
綺麗な一人だ……どっちが姉でどっちが妹なのかはわからないが。
「・・・・」

右の女の子が何かいった。

第一話・悲しみの前、悲しみの後（前書き）

え～これからちょっとシリアルがはいつてきますが……正直言つて執筆している作者も先が読めません。これからどういった展開になるのか……期待していくください。感想なんかを期待していますので、読み続けてくれる人がいたらお願ひします。

第一話・苦しみの前、悲しみの後

二

塞いだ心、忘れた記憶……

時がたち、忘れ行く旧友の顔、あなたは思い出せますか？
たとえ、それがにくい相手だったとしても、裏切った相手だった
としても……

そして、あなたはその相手を赦せますか？

「久しぶり！」

右の女の子はそんなことを言つた。どこかよそよそしいのはなぜ
だろうか？

「え？」

面識のない俺はきょとんとするしかなかつた。

「ほら、辰也が住んでいた隣の家に住んでいた双子の一人、忘れち
やつた？」

おぞましい記憶、一部、塞いだ記憶がある頃に俺を引っ張ろうと
している……いや、両親が死んだことはもう問題はない。踏ん切
りはついた。だが、裏切った相手のことは……

「……帰つてくれ」

俺はそういうて玄関の扉を閉めた。

今、思い出した。あの二人だ、俺を裏切った双子だ。どっちが姉
で、どっちが妹か……そんなことはどうでも良くなつた。

綺麗な花だが、人を傷つける……そんな花に俺は興味はない。
玄関の前にはまだ、いるのだろう。気配がする。

何か言つても帰るかわからない。無性に心が汚く染まっていくの
がわかつた……あいつらに復讐したい。そんな気持ちが出てきた
が……

ふと、一人の女の子の顔が浮かび、その気持ちがつぶれた。そうだ、あの子に連絡しよつ。

携帯を取り出しつれつと電話する。

何度かのコール音…………すぐに出るはずなのだが、出なかつた。

「…………ああ、そういえば海外に行つてるつて言つてたな…………」

昨日そんなことを直接俺の部屋まで来て話したのだった。いかん、頭がぱにくつてゐるから忘れていたのかも知れんな。

玄関の外にはあいつらが、まだいる。いつまでいる氣だ。俺はお前らを町に案内する氣はない。

子どものころ受けた心の傷は、やうにややすく治らない。

ベランダに出る。あいつら一人とは反対側の部屋に行くために壁を伝つてわたるうとしたのだが…………

一陣の風が吹き、俺はアパートから落ちた。

「ぐはっ……」

「ひいつ……！」

右太ももから落ち、少しの間悶絶する。近くにいたおつさんが俺を見てビビッて腰をぬかしていた。じごく、全うな反応だ……それより、俺の部屋が一階でよかつたな……今頃ペちゃんこになつていたかもしれんからな。

驚いているおじさんを置いて、俺はこのアパートにつながっているエレベーターへとむかつた。

みていたおつさんがこれは何かの撮影か?といつたのが聞こえた気がした。

とりあえず、アパートから脱出できた俺はじーちゃんとばーちゃんに事情を聞くために屋上へと向かう。

エレベータであがつていく途中、まだ俺の部屋の前にあの二人がいるのが見えた。憎悪が、心を包む。心は鄙く、凶暴性を俺に持たせようとして……

機械の無機質な声で我に返つた。

考えたつて、時間の無駄だ。俺はさつさとじーちゃんじーちゃんの部屋をノックもせずに開ける。

「じーちゃん！ばーちゃん！！」

「どうしたんだい、そんなに慌てて？」

この二人があの双子のことを知らないことはないはずだ。きっと、承知のことでのこに呼んだに違いない。

「何で、何であの二人を……」

言葉が続かない。あの日のことを思い出しそうになり、心が締め付けられて涙が出てくる。

流れる涙は部屋のじゅうたんをぬらした。

ばーちゃんは普通の顔で言った。

「…………あの二人、お前がお隣だと聞いてよろこんでいたよ」

何を言っているのかわからなかつた。心が何かを求める。そう、

それはあの二人に復讐だ。それだけを求めている。それが、わかる。

「あの二人、お前に謝りたいといつていたよ」

心が、止まつた。

「謝る？何を？」

あの二人が何を謝りたいのか、それはわかっている。

だが、憎しみはまだ、心を覆つている。

いや、覆つているんじゃない、俺の心は今、憎しみで出来ている。

あの一人がにくいのだ、俺は。いや、憎いというのならあのときの友達すべてがにくいはずなのが…………憎いのはあの一人だけだ。裏切られたという気持ちがあるからだろうか？何故かは知らんがあの二人に期待をしていたからなのか？あの二人が俺を救つてくれる信じていたからなのか？駄目だ、よくわからない。

「そうだぞ、辰也」

唐突に後ろで声がした。

「…………じーちゃん」

しゃがれている声のじーちゃんは双子を連れてきていた。どうやら、見事にはさまれてしまつていてるようだ、俺は。

憎しみのこもつた視線があの双子を貫くのを俺は感じた。その視線の持ち主は俺だ。双子は俺の視線を受け止めずに、そらした。そらしたまま、さつき久しづりだといった女の子は俺に言つた。

「「い、ごめんね」

「…………あ、あの」

すじぐ、耳障りだ。あの双子の片割れだと知らずに聞いたときは心地よい声だつたのに、人の心は現金なものだな。

「「い、ごめんなさい」

もう一人もそんなことを言つ。

耳は受け付ける、心は受け付けてない。赦さない、赦されてはいけない存在なのだ、この二人は。

あの時、俺は苦しくて彼女に手を伸ばした、近寄らないで……彼女はそう言つて俺から逃げた。悲しさで押しつぶされそうで手を伸ばした、おびえた顔で……彼女は彼女が嫌いだつた毛虫を見るよつな目で俺から離れた。

俺はじーちゃん、双子を押しのけてじーちゃんとばーちゃんの部屋を出た。

「あ、あのさ、辰也…………」

「だまれっ！！俺は知らない…………僕は、僕は裏切つたお前たちを赦さないからな！！」

あの頃の俺はまだ心のどこかで生きているらしい。

正直言つて、今の俺はあの一人を赦している。だつて、あの時あちらの立場だつたら俺だつてそうするから。友達がすべてだつた。自分が不幸をよぶ少年と一緒にいたら確実に仲間はずれにされてしまつ…………そう思つるのは当然だ。

赦していないのはあの頃の俺。

俺は俺、だが、あの頃の俺は心の奥に住んでいる。

俺は
……あ

の頃から成長しきれていないのか？

第二話・悲しみの後、始まつの前（前書き）

いつも、雨月です。え……毎週土曜日に更新しようかな～って思っています。これからちょっとだけ暗めかもしちゃません。

第三話・悲しみの後、始まりの前

三、

出会いたくなかった、心が痛むから。会いに行きたくはなかった、心が責めるから。

それぞれに笑顔があつた。出会えば消えた。
あなたはどうですか？そんな相手に会うとやはり、消えますか、笑顔が。

雨が降り出したらしい…………どうせ、夕立だ。
あれから、一日がたつた。

しつこく、あの二人は俺の家の前にいるようだ。昨日の様に飛び降りてもいいかもしないが…………さすがに恐怖が俺の心を覆う。正直、高所恐怖症の人の気持ちが生まれてはじめてわかつた気がした。

今、俺の心は少しの変化を見せていた。いや、高所恐怖症になつたわけではない。

裏切つた、あいつらは赦さない…………夜道で襲え、そして俺は警察へつかまつて未来を潰してしまえ…………そういつた汚い感情は何故、あの二人は裏切つたのか…………なんで、裏切つたの？僕は裏切つて欲しくなかつた、信用していたのに…………という心に変わってきた。自分で何を考えているのかさっぱりわからない。われながら、ガキだ。自分で考えていることもわからないなんてな。

あの二人は隣人として、俺に接しているだけなのだ。そう、それだけなのだ。過去のことは関係ない、気にしない、割り切るのだと

言い聞かせた。

心を割り切つて、俺は深呼吸する。俺はガキじやない。

玄関へと向かい…………扉を開けた。

「辰也！」

「辰也君！」

「一人はとてもうれしそうな顔をした。この一人に俺はこれから、割り切ると言つとも悲しい言葉を言わなくてはいけない。心が痛い、だが、こうしなくてはこの一人を恨まずには……いられない。」「はじまして、お一人さん。俺の名前は篠辰也。よろしく！」
「た、辰也？」
「…………」

落胆、恐怖、絶望…………そんな風に田の前の一人の顔は変わつていった。心が締め付けられる。

「ど、どうしてそんなこというのよ、辰也！」

憤怒の表情で食つて掛かるように俺に問いかける双子の子。ああ、そういうえばこの子はすぐ……いや、俺は知らない。この子のことなんて知らないのだ。だって、今日ははじめてあつたんだから。「ごめん、初対面の人に名前を呼び捨てにされたくないんだけど……苗字ならいいんだけど」

「つ……！」

心が折れそうになる。もうちょっとと、この子は確実に泣く。この子を泣かせたい、お前の所為でこんな風になつたのだと思いらせたい。

しかし、これらえた。このことはあの頃に比べて……強くなつたのか？ 困惑が俺を包む。

「み、水森…………」

「がつんつ…………」

「俺は篠だ！！！水森じゃない！！！」

玄関の扉を右の拳で思い切り殴つた。その音にびくつとする双子。

「あ、ごめんごめん…………」

右の拳がめちゃくちゃこみたい。涙が出そうだ、いや、マジで。

「た、辰也君…………どうしちゃったの？無理してるみたいだけど？」

その日、その顔…………俺を怖がっているその顔だけで俺の心を誰かが支配していく…………それを抑えることが今の俺に出来るのか？いや、氣づけ、辰也…………怖がっている顔なんかじゃない、この子は心配しているのだ、俺を。

「いや、急に玄関を殴りたくなつたから…………」「めん、気にしないでくれ…………さ、町を案内してあげるからついてきて」

俺はそつこつと歩き出した…………右手を振りながら。

一人のことを完璧に無視して…………俺は空氣に町を案内するかのようにして雨の降る中かさもせずに歩いていた。

一通り町を案内して俺は町の中央にある公園のベンチに腰掛けた。既にベンチは濡れていたが関係なかつた。

町を案内している間、二人はひつきりなしに俺に話しかけてきた。昔から話しかけてきた活発な姉、あんまり俺に話しかけてくることはなかつたが、姉よりも長い間となりにいてくれた妹…………名前は完璧に忘れてしまつてはいる俺が悲しくなつた。

話しかけられても俺は自分の心を抑えることでいっぱいだつた。「この町、どうだつた？よくわからないところがあつたら教えるけど？」

「…………辰也、こっちにおいでよ」

青やめた顔でそういう双子姉。

「風邪、引いちやうよ？」

泣きそうな顔でそういう双子妹。

「…………一つ、昔話をしてあげる。面白くなかったら聞かなくていいけどね」

惨めだ。俺はそう思つた。

「ある日さ、一人の男の子が家に帰つたんだ。そこには首をつつている父と家宝だといつて日本刀に貫かれている母を見た。愕然

とした男の子なんだけど……手紙を見つけて読んだ。漢字が多くてわからなかつたんだけどね……今では中身も忘れちやつてるよ、きっと」「

双子姉はぎょつとして俺を見ており、双子妹は息をのんだ。

「それから、彼がどうなるか……そうだね、誰が彼を引き取るか。そういうことはまだ決まっていない間は小学校へ行くことになつたんだよ。遺産の話をあまり聞かれないようにと厄介払いにね。ろくな親戚じゃないよね、まったく。小学校、いつたつていいことはなかつた。その男の子、仲良くしてた双子がいたんだけどね……」

「……」
双子と聞いて田の前の二人の顔は青ざめた。いや、もとから青ざめていたから勘違いだらう、俺の。

「…………その男の子の心、壊しちやつたんだよ。まるで、汚物でもみるかのように男の子を見てね…………信用してたのに、心を一人に預けていたといつていい存在だつたのにね。男の子を選ぶことなく、他の友達をとつたんだつて男の子は思った。ああ、壊れた心はあとでちゃんと戻つたよ？他の人が治してくれた…………ある程度成長したその男の子の前に双子が何をしにきたかはわからないけどきたんだよ。せつかく治つた心を再び壊しにきたのかつて男の子は思つてる。憎い、そう、殺したいと思つているのかもしれないね。けど、成長している男の子は双子を赦している。おかしな話だよね」
「…………それでさ、くだらない話だけど、それほどまでに男の子は双子のことを信じていたんだよ……どう？ちょっと悲しいお話だつたけど？」

感想も聞かずに俺は立ち上がり家へと帰ることにした。いかん、そろそろ風邪を引きそうだ。

歩き出していく

誰かに背中から抱きしめられたのを感じた。

「い、ごめん……ごめん……！」

姉のほうだ……憎しみが心を支配する……彼女をどうにかし

ないうちに早く引き剥がさなければ……

憎しみの声でどけ！と俺は言つことにしたのだが……

「ど、けよ……」

悲痛な声しか出でこない。その声を自分自身が聞くことによって心は痛み、悲鳴を上げる。

「ごめんね、辰也君」

妹のほうも俺を抱きしめる…………心が人の形をしているのなら今、頭を抱えて目から血の涙を出しているに違いない。

涙が頬を伝おうとしている…………いや、涙じゃないな、これは。雨だ。雨粒が俺の頬を流れていつているだけだ。あの日、涙は見せない、流さないつて決めているからな…………まあ、嘘だが。

「…………はなれてくれ…………人が見てる」

俺は一人を引き剥がした。

「…………じゃあな」

そして、走り始めた。勿論、あの一人が追いつけないほどの速さで俺は家に帰つてタオルで頭を拭き、さっさと風呂に入つて布団をひっかぶつて寝た。そのおかげか、風邪を引くことはなかつた。

第四話 始まりの前、事件の後（前書き）

いつも、雨月です。最近は暑かつたり寒かつたりがこぢりでは続いており……季節の変わり目を体感しています。さて、これからどういった展開になるのか……期待していく待つてください。

第四話 始まりの前、事件の後

四、

悩み、もがき、答えを探す。

求めたものが何なのか、得たものが何なのか……
それが必要だったのか、そうではないのか……
あなたは、知っていますか？

夏休みも終わりを告げ、始業式の長い長い校長の話も聞き終えて
LHRにて転校生の双子…………吉崎理恵（姉）と里香（妹）の紹
介があつていた。

「お～あれがお隣さんか？」

工藤大策がそんなことを言つてゐる。けつ、不良のくせして皆勤
とはお前、不良じやないだろ？さつさと不良をやめる。

「ああ、そうだ。僕が見た一人はあの一人だからな」

渡辺徹、お前が何故答える？田の下にくまが出来てゐるのは地下
でばれないように売りさばくといつていた薬の影響か？秀才のくせ
して社長出勤とはお前のほうが不良だな。

「ほお、つらやましいな～民子、怒るぞ、きつと」

「ふむ、そうもいくまいよ…………あの一人、辰也の過去に関係して
いる一人だそうちからな」

この一人には過去の話について既に話してある。話したとき、こ
の一人は鼻で笑いやがつた。まあ、うじうじしていた俺が悪いのも
あつたのだが…………今ではいい思い出だ。

「なるほど、それなら放つておくのが一番だろつた。力が要るとき
は言つてくれ」

「ああ、そうだ。僕らに面倒が回つてこないようにしておかないと
いけないようだな。事前に案を考えていたほうがよさそうだ」

この一人は自分が世界の中心だと考えてゐるから本当に「つらやま

「いよな……まあ、なんだかんだで」の一人、俺のことを心配してくれているようだし。

放課後となり、双子の周りには人だかりが出来た。まあ、綺麗だつたからな。

今、憎しみの心は消えている。ただ、あの一人を見ていると悲しい。

「おいおい、何をそんなに思いつめている顔をしているんだ、兄弟？」

「てめえの兄弟だつたら俺はもうちょっとじつい」

工藤大策が俺の肩を掴む。軽く掴んだだけで物凄く痛いんだが？きつと、りんごを掴んだだけでピックバンみてえなことがおきるんだろうな。

「で、なんか用かよ？」

「うむ、良くぞ聞いてくれた……これだ」

手渡してきた一枚の紙を手に取つた。

「…………君も女子高に侵入しようつ？…………お前、不良だろ？」轟傑の拳『つて異名が泣くぜ？不良はこんなことしないだろ？』

するのには变态だ。

「まあ、一応不良だがな…………これにも色々と事情があるんだよ。ああ、この紙は気にしないでくれ。これとはぜんぜん関係ない事情だから」

「事情？」

困つたものだといつて工藤大策は話し始めた。

奴の話を要約するところだ……渡辺徹にとある金庫を盗られ、女子高の更衣室に持つていかれたとの話だ……知り合いの名前が混じっていたのは氣のせいか？

「徹はどうした？言つて返してもらえよ」

「いや、奴は先ほど職員室に連行されていった。きっと、あの薬のことがばれたのかもしれないな」

なるほど、珍しく奴が失敗したというわけか……

「それで、お前に頼みたいのだ。さすがに一人で行くのは気が引け
るし……」

ははーん、巻き込む気だな、俺を。さつきは面倒ごとに巻き込
まれたくなさそうにしてたくせしてよ……

「……あの双子と話したいという心を抑えて俺についてはく
れんだろうか?」

「誰も話したいとおもってねえよ…………」

整理がついていない、話したつて…………傷つけるだけだらう。

「わかった、ついてく」

「おお! さすが我が兄弟!」

「だから! 俺はお前の兄弟じゃないつて!」

「民子と結婚すれば兄弟だ!」

「…………」

豪語するお前が俺は怖いよ…………ほら、クラス中の連中が俺たち
を見てるぞ? 冷めた目でな。

女子高に女装して侵入するというよくあるんだかないんだかわ
らないことをせずに俺たちは素直に警備員さんに事情を説明した。

「うーん…………ちょっと待つてね、君たち」

人のよさそうな警備員さんはそういうてトランシーバーでなにや
ら連絡をしていた。数分後、おとなしく待つていた俺たち（工藤大
策は見た目が不良なため、警備員さんと話すときはかなりおどおど
して話すようにと俺が釘をさしておいた）の元へ女性の警備員さん
が現れた。いや、よくよく見たら…………警察だ。

「さ、ついてきて」

てつくり連行されるのかと思ったのだが、校内にあっさりと入る
ことが出来た。どうやら、この人が俺たちを連れて行ってくれる人
のようだ。まあ、近々この女子高も共学制になるらしいからな
今ではどうでもいいことなのかも知れんな。

そして、あることを俺は思い出した。

「…………大策、ここって今思えば民子ちゃんが通っている高校じゃないか？」

「ん？ ま、まあそつなんだが…………」

民子ちゃんが通っているのなら別に俺たちが赴かなくても民子ちゃんにとつて来てもらえれば良かつたんじゃないのだろうか？

そのことを大策に伝えると奴は首を振つた。

「…………それがさ、とられたのが民子には見せられないような奴で

前を歩いている人に注意をしてそんなことを言う。

「なるほどな…………なら、放つておけばいいだろ？」「

「俺の名前と住所を徹が書きやがった」

「そいつは放つておこうにも無理があるな…………」

何を忘れたのかは教えてくれなかつたが、奴の首が飛びぐらいの威力があるのだろう…………顔が青ざめている。どんな相手でも顔色変えない工藤大策だが、珍しいこともあるものだ。

「あ！」

まだ女子生徒が残つていたのか、よくわからないがちらりと姿を見せ…………それを見た工藤大策が叫ぶ。

「どうした？」

「今の子が持つていつた！ 俺、先に行くぜ！」

「お、おい！ 大策！ ？」

俺と警官を残して奴は走つていつた。あの巨体での速さを出す秘訣はなんだろうな？ まさか、心臓とかが一個あるとか？ それなら肺も四つあるに違いない。

「えーと、今の子は何でいきなり走り出したのかな？」

警官は俺にそんなことを言つてきた。

「なんだか彼が探していたものを持つていつていた女の子がいたそ�で…………あわてて取り返しにいきました」

校庭側に行つていたからな…………

「うへん、あつちは確か……プールがあるところなんだけど」「さて、質問だ。よくわからん男が女子しかいないであろうプールに行つたらどうなる？

「お前はいい友達だつた、大策。じゃ、おまわりさん……俺、この後彼女と甘いひと時がありますので……」

「ほら！君の友達でしきう！逃げない！」

腕をつかまれ、俺もプールへいくこととなつた。やれやれ、これはしようがないことなのだ。別にみたいてわけじゃないんだぜ？

第五話・事件の後、変革の前（前書き）

毎週土曜更新と言つておきながら、先週更新していないですね。
すみません、色々どう迷惑をかけてしまって……この小説について、ふと、終わり方を考えたのですが……つづむ、今のところは相打ち（…？）しか思いつきません。

第五話・事件の後、変革の前

五、

関係のない出来事、そう思つていませんか？

あの日の出来事、今につづいているのかもしません。

あの日の裏切り、今の信頼…………

今あなたはどうですか？続きますか？それとも…………

プールでは既に大騒ぎとなっていた。

「か、返してくれ！」

育ちのよさそうな女子を相手に工藤大策が襲い掛からんばかりだ。だが、俺は何もせずにそれを見ていた。

「何してるの！止めないと！」

「え～いや…………別にいいとおもいます。だつて、あいつの妹ですから」

そう、育ちのよさそうなお嬢様の名前を工藤民子といつ。似てないと評判の兄妹で、彼がぐれたのもこの妹の所為だといつていい。俺が保障していいだろう。

「やめてよ！お兄ちゃん！これは私が拾つたものなの！」

「やめろ！これがお前に渡つたら俺は辰也に殺される！」

「ん？なんだか俺に関係しているような言葉だつたが…………」

もみ合つていた結果、握つていた箱は飛んでしまった。高い壇を越えて外に出て行つてしまつた。

「あ～！～もう！お兄ちゃんのせいだよ！～！」

民子ちゃんはすばやくいなくなり、膝をついている工藤大策だけとなつた。

「なあ、あの箱の中身つてなんだつたんだ？」

「…………知りたいのか？まあいいや…………あればお前の恥部だ」

「恥部！？」

なんだかとても危なげな響きだ。

「……民子に何か頼みごとをするときは何かを『えなくては動かんのだ……だから、渡辺徹からお前のはずかしい写真を買い取つて民子のえさにしよう』と……」

「最悪だな、こいつは……」

「それと、まだ続きがあるんだが……一週間以内にさつきの箱を回収しないと今度は俺の恥部を町中に張り出すと渡辺徹が言つてきた。『冗談だとは思つたが……』」

「奴が冗談を言つはずがない。奴は常にまじめだ。」

「……『冗談だとは思えなかつたから素直にこじまでやつてきたのだ』」

その考えは正しいぞ、工藤大策。あいつ一人に対しても俺たち一人の脳みそをもつてしても勝てないだろうからな。ん? こんなところで油を売つてゐるほど俺には時間があつたのだろうか?

「そんなことより、さつさと追いかけるぞ!」

「そ、そだつたな……」

消えていつた民子ちゃんたちを追つて俺らは警察の人に頭を下げて一度と來ることがないであらつ高学歴の学び舎を後にしたのだが

「あ、お兄ちゃんたち…………」
そこにいたのはあたりをきょろきょろと見渡してゐる民子ちゃんの姿だつた。

「どうしたんだ? 箱は?」

通行人にでも拾われて中身を確認されたら確実にお外を歩けなくなつてしまつような写真が入つてゐるのだろう……俺は恐怖を覚えていたのですばやく民子ちゃんに尋ねた。だが、彼女は首を振つてこういつた。

「……それが、私が外に出てきた時点でもつなくて……」

「!?」

時既に遅し!俺の恥部がローカル新聞に載るかもしない!/?助

けて、じーちゃんばーちゃん！

「と、とりあえず手分けして似たような箱を持つている人を探すぞ！」

即席で結成された『俺の秘密の箱を探せ！チーム』は三つに分かれて箱を探すために翻弄することとなつたのだった。

「やあ、奇遇だな、辰也」

電柱に背中を預けてたつているのは白衣をまとつた徹だつた。顔が非常に愉快そうだ。こちらとしてはそんな面を見るためにつりうろしているわけではない。

一徹！お前、あの学校へ俺は後ろこそびれるでかい女

「…………から何か飛んできた箱を見なかつたか?」

「ん？ ああ、あれか…… そういえば転校生の一人組みが拾つて中身を確認して……」

1
?!

絶望がこの空を覆つた気がした。いや、まあ、今では他人……隣人だから他人でもないか……………とりあえず、ちょっと自体は悪いほうに転がつていいいるようだ。いや、既に転がり終えてしまつたといったところか？

「…………脅かすなよ」

気がつけば徹の手には争奪戦を繰り広げていた目的である箱が握られていた。

「まったく、嘘までついて何が楽しいんだか…………」

双子を出産するがなかなか戻らない。

「ああ、双子に渡つたのは嘘じゃないよ。彼女ら、中身も確認しちやつたし……」

「…………」

啞然とした調子で徹を見ると奴は首をすくめて弁明を始めるようだつた。

「僕が職員室から出てきて君たち一人の後を追いかけていたりちょうど箱が出てきてね…………敷地外にいた双子のところに箱がやつてきたのさ。彼女たちが中身を確認するのを見届けて、僕は双子に箱を返してもらつたというわけさ」

「つて、おい！一部始終を見てたんなら速めに返してもらえよ！」

そうつっこむと意外な言葉が返ってきた。

「おいおい、つっこむとこりはヤバいじゃないだろ？？」

「？」

「何故、ここに双子がいたのか…………不思議じゃないのかい？」

言われて見れば確かにそうだ…………この学校に友人がいるのだろうか？

俺の考えを見透かしてのか、徹はこいついた。

「確かに、そうだろうね…………だけど、何も女子だけが友達つて限らないだろ？？」

「おいおい、こりは女子高だぜ？女子高に男子がいるわけねえだろ？」

「？」

俺を指差して徹は言った。

「いるだろ？ここに？考えればすぐに思いつくさ。彼女たちは君に用事があつてここにまできた…………もしくは、君が何故、女子高なんかにはいって行つたのか知り合いとしては…………結構理由を知りたいと思うけどね？」

「…………」

まあ、確かに知り合いがこりこりつた場所に入つていつたら俺も知りたがるといえば知りたがるが…………

「…………あいつら、もう帰つたのか？」

「ああ、君の写真とその箱を交換してあげたら帰つていっちゃつたよ」

俺が何か言いかけようとしたその瞬間に……

「た、大変！辰也さん！！」

走ってきたのは民子ちゃんだった。曰くから騒がしい……失礼、元気のいい彼女がさらに騒がしい……失礼、元気がとてもよろしい。どうしたのだろうか？

「どうしたんだ？またあの馬鹿（大策）が何かやらかしたか？」

冗談でそう言つてみると彼女は頷いた。

「う、うん！お兄ちゃんが私たちの学校の女番長とにらみ合いになつちやつて……」

返答に困っている俺に徹は、言つた。

「…………見捨てよう」

「あつさりだな～おい…………ほら、友人代表としていくしかないだろ？暴力沙汰とかになつたら色々とやばいぞ？」

珍しく嫌がつている徹を引きずりながら民子ちゃんとともに俺たちは大策のもとへと向かつたのだった。

写真はのち程どうにかして返してもらわないと……

第六話・変革の前、その後（前書き）

え～今週もつま～く更新できたのよかったです。双子編はだ
いたい十話ほどで終了する予定です。結末も既に決めていますが…
…読むか読まないかはあなたしだいです。双子編の結末を見なく
ても一応、続けて読んでも問題はありません！感想なんかお待ちし
ていますのでよろしくお願いします！

六、

写真はそのまま
しかし、現実はそうもいかない
変わり行く日々、変わる友人
変えたのは時間、もしくは……

女子高の近くにある空き地にて、犬猿の中と称されている俺らの高校の番長と民子ちゃんたちが通つている女子高の女番長さんがにらみ合いをしていた。ああ、犬猿の仲と称されている…………といつのは以前の番長同士で、今は代替わりをしており時代の流れを感じずにはいられないな。

緊張した空気がその場を包み込んでおり、一触即発の空気にその場にいる誰もが空気を感じ取ることさえも難しく感じている。

「辰也、君が僕をここまで連れてきたのは構わないが、……君がどうにかしてくれ。僕は近づけない」

女番長は徹の従姉……弱点が存在しないと思われていた徹に対し、ての最終兵器である。徹が彼女の半径五メートルに入りこめば徹はボコボコにされてしまうらしい。

「…………ああ、わかった」

端正な顔立ちにトラでも睨み殺してしまいそうな眼力…………すらりとしているが、強靭な一撃を相手にお見舞いするという徹の従姉、名前を渡辺律わたなべりつという。右頬に傷が入つており、年季の入つたぼろぼろの制服を着ている。

「民子ちゃん、君は今すぐここから離してくれ…………危険だから俺はここまで道案内してくれた民子ちゃんにそいつ告げる。

「わかった」

「じゃ、辰也よろしく」

徹もついでに離れていつてしまつた。「つむ、律さんたちは五人ほどいるんだがこつちは俺と大策だけかよ。……」

平和主義である俺はこそそと大策の背中まで言つて耳打ちをする。じうやら相手にはまだ気がつかれていないようだ。すじいぞ、俺。

「大策、お前、何してるんだよ」

「…………睨まれたからな」

おいおい、睨まれただけでこんだけの空氣を出すのかよ。……

「ほら、いくぞ。」これ以上時間を費やすな、お前が何故、睨まれたのか思い出せよ

「何つてそれは…………ああ、そりいえば箱を探している最中だつたな」

ようやく思い出したのか、大策は相手に對して背中を見せた。

「おつと、逃げるのかい？」

「ああ、ちょっと用事があつてな…………友人の一大事なんだ」お前が引き起こした一大事でもあるんだがな。

「友人？…………お、辰也じやないか？」

友人という言葉に反応して律さんはこちらを見る。既にあの人は俺を標的としたに違いない。

「あ、あはは…………どうも」

俺はもてるほど愛想笑いというスキルを持つて彼女に笑いかける。

「久しぶりじゃないか、どうだ、これからお茶しないか？」

二口二口しながらこつちにやつてきて…………あれ？ 気がつけば大策がいないぞ？ お、おいつ！ 何電柱の影から徹と民子ちゃん、そして大策が親指を突き出してるんだ！？

「さ、辰也行こうぜ」勿論、あたいがおじつてやるからな「はは…………じうも」

「おり、行くぜ、お前ら」

「…………おじつ」「」

俺の肩を確実に押されて律さんは上機嫌に空き地を後にしたのだった。

「…………」

よたよたとした調子で俺は階段をゆっくりと上る。その後、彼女は制服姿の俺に酒を飲ませ、自分も飲み、何件かはしゃぐ。

「いや～あの岩山睨みつけた甲斐、あつたな～」

これは律さんが言つていたことであり、間違いなく俺を誘い出すための口実だつたに違いない。あの後俺の家に行くとこねまくつていた律さんを律さんの補佐をしている人たち?と一緒に説得してここまで帰つてきたというわけである。自分が酒に強い体质でよかつたと思ひば。

「…………辰也」

ふと、そう…………そんな声が聞こえてきた。階段を見上げて、声の主を確認する。双子の姉…………理恵だ。

「…………おえつぶ…………なんか、用か?」

気分が悪いとさすがに何にも考える余裕がないな。俺は壁伝いにあがつていつて彼女を避けるようにして階段を上りきつた。

「大丈夫なの?」

彼女も上がつてきてそんなことを俺に問う。

「…………さあな」

「辰也ー?」

理恵がいきなり大声を出したのできょっとしたが、気がつけば俺は床に転がっている。無理をして上つてきたのが祟つたのだろうか? 気分が悪くなってきたので下を向いて

「(1)はつ…………のみすぎたかな」

「未成年なのに…………」

あ～あ、ちょっとやりすぎて紅い液体まで出でちゃつたが…………

理恵には気づかれていないようだった。明日の朝、さつさと処分しちまつたほうがいいだろ?」

「……じゃあな」

「本当に大丈夫なの？」

「良くあることだ……気にするな」

片手を挙げてさよならを告げて俺は玄関を開けて部屋の中に入ったのだった。

「……アルバム、あるかな」

気分が悪くて今にも倒れそうだったのだがふと、これまで一度も見ようとも思わなかつたアルバムが急にみたくなつた。もしかしたらもう少しで母さんたちの命日だからかもしれない。

押入れの中にあるであろうアルバムを俺は探そうとしてやめた。写真の中の俺はきっと笑つてているだろう。その自分を見るのが俺にはつらいに違ひない。

あの双子もきっと俺と一緒に笑つている。そんな彼女たちを見るのが俺はつらい。

「……寝るか」

ベッドに倒れこみ、さて、どんな夢を見るんだろうか？といったゞでもいいことを考えながら目を閉じる。風呂にも入つていなし、歯磨きだつてしていない。

疲れていたためか、そのまますぐに寝付くことが出来た。

これが夢であることは俺が一番わかっている。

「なあ、何故あの双子が許せないんだ？」

「忘れたの？僕らはあの一人に裏切られたんだよ」

「それは……そうだが、もう何年の月日が過ぎていいつて思つているんだ？」

「だからだよ。月日が過ぎるほど忘れずに根深く残つてしまつてだつてあるんだ」

「……俺はそう思わない。あれがいやな事だつて俺だつて知つてる……だからこそ、俺はあの双子を許すべきだと思つ」

「根拠は？」

「あの一人は充分反省している」

「…………どうだか」

「人は変わるもんだ。お前や俺だつて変わるべきだ」

俺の夢を終わらせるためか、対話をしていた相手は首をすくめて影に消えた。

第七話　...Jリから（前書き）

一応、双子編は十話までよっていっています。

七、

それは幻影、それは残像。
見えない影におびえ
見えている恐怖におびえない
矛盾する状況に彼は……

気がついたら午後だった。

「…………」
「遅刻だ。それ以外のなんでもない…………」
「……」
「……」
「頭…………いてえ」

昨夜のドンチャン騒ぎが確実に俺を苦しめているのがよくわかる
頭痛。一日酔いつてのはつらいもんだ。何故、未成年の俺が苦しみ
を知っているのだろうか？

「おや、やつと起きたかい？」

部屋の中にはあちゃんがニコースを見ながら座っていた。じー
ちゃんも近くに座つてお茶をすすつている。

「学校には休むつて伝えておいたからね」

「…………」

ふらつとなる体を足で支えておきると、じーちゃんが指差したと
ころに置かれていたおかゆをじつと見る。

「遅すぎる朝食が体にいいかは分からぬけど食べておくんだぞ」

「うん、分かつてる」

じーちゃんとばあちゃんは何も言わずに俺の部屋から出て行った。
きっと、何か用があつたのだろうが、俺が一日酔いであることに気がついていて今話しても無駄だと悟つたのだろう。じーちゃんばあちゃんが話そうとしたことはなんだろうか？今の俺の脳みそでは考
え付くことなど出来ない。

「屋上にでも、行くか」

誰に言つでもなく…… しいて言つなら漠然とした不安を持つて
いる自分に言い聞かせたのかもしれない。

屋上にはすばらしいほどのそよ風が吹いていた。そろそろ夕飯の
買い物時の今に俺は寝ぼけ眼でここまできた。なんだか、自分が何
を言つているのかわからなくなってきたが、そんな自分の思考を切
り替えるためもある。

「…………」

夕日を見つめることもなく、道行く人を眺めることもなく……

俺はただ、空と大地の狭間を見ていた。

母さんと父さんの命日まで…… 後、三日。

毎年毎年考えているのだが、父さんは…… 本当に母さんを殺した
のだろうか？ 時がたつていくたびに俺の中で父さんと母さんは消
えていつている様な気がするのだ。

いつか、殆ど思い出せないといつ日が来てしまつかもしれないとい
う不安がある。

そんなことはないだろうが。

母さんを殺したこと間に違ひはないはずだ。

警察官だつて言つていたし、遺書にも自分が殺したと…… 震える
字で書かれていた。ただ、ただ…… おかしいと思うことは子ども
ながらにあつた。母さんは父さんの家系で家宝と言っていた日本
刀で刺されていたのだ。心臓を貫かれていた母さんの顔は…… 微
笑んでいたと俺の記憶は言つている。人は死ぬとき、微笑むことが
出来るのか？

瞬間に強めの風が吹き、俺の短めの髪は若干風を感じた。

俺はこれからどうするべきなのだろうか？ ただ、ただこのままず
つと平凡な一日を積み重ねていき、あの頃はああして笑つていたな
あと思い出すだけでいいのだろうか？ それだけではいけない気がす
る。俺がするべきことはそれではない。そんな気がするのだ。俺の

人生を変えたのはやはり、あの事件……もつ一度詳しく述べる必要があるのではないのだろうか？双子のことを考えるのではない、あの日の出来事を客観的に考えるべきなのだろう。

だが、俺にとつてあのことは既に終わったことなのだ。いまさら思い出しても……

『あの日から僕らはあの双子に辛酸をなめさせられてきたんだろう？』

「違う、あいつら一人は関係ないだろ？ ただの……お隣だ」

『そうなのかな？ 僕はそうは思わない。大体、不幸を呼ぶ少年なんでおかしすぎる。今考えてみてくれよ。成長した君にならわかるはず』

『関係ないっていつててるだろ！…………』

がたんっ！！

屋上の扉に何かが当たる音がした。俺は静かにそちらへ視線を向ける。

「…………辰也君？」

「里香……か」

そこにいたのはあの日となんら変わっていない……俺を恐がっている目があった。絶えられず、目をそらす。まあ、考えてみればこの屋上に先ほどまでいたのは俺だけだった。心中で叫んでいたつもりがきっと、口から出でてしまったのだ。いきなり謔げ出したら誰だつて……驚くだろう。

「…………」

「…………」

先ほどまで吹いていたすばらしきそよ風はどこかに去ってしまい、重苦しいだけの沈黙がその場を支配していた。

いたたまれなくなつた俺は、部屋に戻るために里香の隣を通り階段に行こうとしたのだが……

「待つて」

俺の目の前に里香が立ちふさがる。その瞳にはまだ先ほどまでの
おびえたような色は見て取れなかつた。

「何だよ？俺に何か用でもあるのか？」
責めているつもりではないのだ。だが、口調は厳しいものに徐々
になりつつある。ただ……ただそれだけで里香はおびえた瞳を俺に
向ける。

「用つて言つか……ちょっと、お話したくて」

控えめでおしとやかな妹……彼女は俺に對して真つ向からお
びえた瞳を向けてくる。

『押し退けても部屋に戻っちゃになよ。あの日のこと、思ひ出しち
やひよつ』

あの日の俺はそう言つてゐる。そして、里香はもうじきべるいと
もなく、ただ、俺の答えを待つてゐるのだろう。

「……わかつた、何だ？」

結局、俺は昔でさえ明確な意思をあまり見せなかつた里香のよう
つとした一面にものめずらしさを覚えて里香の提案をのんだのだった。
た。

無風、ただ、一人の間に吹く風は重いものだつたといつていい。
話がしたいといつた里香は一生懸命俺に話しかけてくれてゐる。
昔はあんまり話していなかつたし、こちらが話しかけてもただ頷い
たりするだけだった彼女は様々なことを話しかけてくれて入る
のだが……

「あ、あのね、そのことについては辰也君はどう思つて
え、さ、さあな……」

俺のほうがどう答えたらいいかさっぱりわからない。だから、
重いものだ。会話のキャッチボールなんでものじやない。ボーリン
グの玉を投げあつてゐる気分である。

そんな俺にとつては苦しい光景は十分ほど続いた。俺の中の時計

では軽く一時間は越えていたと思つたんだがな。

「え~と、じゃ、また明日……」

「ああ、また、明日な……」

変貌してしまった里香に戸惑つていた自分が情けなく思いながらも、悪い気はしなかつた。

「また、明日……屋上に来てくれるかな?」

「え? あ…… あ、な」

「ふふ、出来たらいいから」

軽く笑つたその微笑にぎょっとしながらも、俺は逃げるようにして自室の扉を閉めた。形容しがたい感じが俺の心の中で暴れまわっている。

「…………」

アルバムがみたい。切にそう思つた。傷ついたつていい、笑顔を見ることができない。

押入れの中を引っ搔き回す」と、十分。夕食も食べずにがんばつているとようやくそれは俺の田の前に顔を出してくれた。埃を被つて、俺の手に乗ることをずっと、ずっと夢見ていたのかもしれない。それはずっと俺がそらし続けていたあの日の前の思い出、捨ててしまひたかった思い出だ。

適当に開けると、写真の中の俺は確かに笑つていた。そう、心から笑つているといつていい。その左右にいるのはあの双子だらう。面影がきちんと残つている。これは……小学生になつてすぐに皆で撮つた写真だ。

「?」

そこで、妙な感じがした。よく考えてみるとおかしな話だ。父さんたちが死んだのはもう、それこそ十年ほど前だ。物心つくかつがないぐらいの時期の隣の男のこのことなどおぼえていはづがないのではないか?

こちらが覚えているからといって、あちらが覚えているという確証はない。

許す、許さないの前に何か重要なことを俺だけが知つていない気がする。あの日の俺と今の俺はあの日の事件でつながつている。では、あの双子と俺は？俺側からは裏切りと失望があの双子とつながつてゐる何よりの証拠だ。あちらはどうなのだろうか？一緒にいた時間は本当にちょっとだ。罪悪感なんて感じるものだろうか？

こんなことを考えている間もアルバムをめくる手は止まらない……小1の頃の誕生日に向けてほぼ一週間にごとに撮られた写真は進んでいく。

「……
ふと、一枚の写真のところで俺は手を止めた。それに双子は映つていらない。親戚とかと一緒に撮つた写真だ。

「……
皆、笑顔だったのだが……一人だけは笑つていなかつた。俺は、その顔が誰か勿論知つていた。

第八話・見えぬ関係（前書き）

七月七日、えー実は皆さんに聞きたいことがあります。雨月の作品を以前読んだことがある方がいるかどうかわかりませんが……夏に向けて一つ息の長い作品でも書こうかなと考えています。それで、これまで雨月が書いてきた小説の中でお気に入りの作品なんかがあれば教えて欲しいと思います。まだまだ至らぬ部分（誤字など）が多くありますが、がんばって執筆したいと思いますので出来れば協力してもらいたいなと思います。勿論、この小説も続けていきたいと思っていますのでこれからもこの小説をよろしくお願ひしたいと思います。

八、

冤罪、それは責めたものが償うべき罪?
贖罪、それは罪をあがなうこと?
罪は何のためにあるのだろう?

彼の罪とは何なのだろう?

それは俺にとつておじにあたる存在。父さんの……弟だ。

「何で、無表情なんだろう?」

初めてアルバムを見てみると不思議なことが多いものだ。
それこそ心靈写真がこのアルバムの中を探してみれば一枚か一枚か
あるかもしれないが（後で確認したがまつたくなかつた）全員が笑
つていてる写真のなかで一人だけが笑つていない写真も珍しいものな
のかもしれない。そういえばおじさんが笑つてているところをみたこ
とはあまりなく、生真面目……というよりもどこか陰のあるような
人だった。

ピンポン

「あ、はーい」

誰かが来た様で、アルバムを一度閉じると俺は玄関へと向かつた。
のぞき穴で確認すると……

「おじさん……」

先ほどまで写真の中で無表情だった人がそこには立つていた。笑
みを浮かべて。

俺が扉を開けるとおじさんは中に入ってきた。やはり、笑みを浮
かべて。

「やあ、辰也君。約一年ぶりだね……兄さんの命日が過ぎるまで

この近くのホテルにいることになつたんだ。ほら、お土産渡されたのは缶ビールとかだった。

「……」

言葉に詰まつているとおじさんはアルバムを見つけたよつで、俺をちらりと見てたずねる。

「みていいかい？」

「ええまあ……」

どうせ中に入つている写真はガキのころのものだ。こまさりみられて恥ずかしいことなどないだろ。

おじさんがアルバムを見ている間に俺はお茶菓子とお茶を準備してその対面に座つたのだった。

「今、幸せかい？」

「え？」

唐突にそんなことを尋ねてくるおじさん。俺はぼそりとしていたので再び聞き返す。

「どういふことですか？」

「今、辰也君は幸せかい？」写真の中の君はとても幸せそうだ……今はどうなんかい？」

生半可な答えでは満足しないといふそんな強固な意志を感じられる。両親を失つた俺を心配してくれているのだろうかと思い、俺は答えた。

「幸せ……ではないんですけど、不幸だとも思つてません。これからまた、幸せなことがあるでしょ？」

「そうだな、君はまだ若いから未来があつたんだつた…………あの日で終わりつてわけじゃやつぱりなかつたんだな…………さて、それだけ聞ければ充分だ……私は失礼させてもらおう」

いきなり立ち上がりつて玄関へと向かつていくおじさんを俺は追いかけながら未だにこの人がどういった人なのかとはかりかねていた。

「辰也、いる？」

玄関が勝手に開き、そこから理恵の顔がこちらを見てくる。しか

し、おじさんと田があつたといひで……

「あ！」

「ん？ おや、君は…… そつか、やつぱり未来はあつたんだな」

「おじさん、理恵を知つてゐるんですか？」

「いや、知らない」

「……」

『う考へても嘘っぽい出来事。それはいいの空氣を変えるだけの力を持つていた氣がした。おじさんは靴をはいて何事もなかつたかのように俺を見て手をあげた。

「じゃ、また今度会おう、辰也君」

「ええ、わかりました」

「……」

理恵は氣がつけば俺の後ろ側について、そつと俺のTシャツの裾を掴んでいる。

扉が閉まり、理恵は俺から離れて彼女も扉に手をかける。

「え、えーと、じゃあね」

「？」

何のために理恵がここに来たのかさつぱりわからなかつたのだが

……理恵はさつたと出て行つてしまつた。

「それにも……」

それにしても、あのおじさんと理恵の間には何があるのだろうか
？ まあ、お隣だつたし、さつきだつてアルバムを見ていたのだ。
おじさんが『ん？ おや、君は……』の後には『アルバムに載つて
いたこじやないか？』かもしけない。

だが、それには理恵の反応がいささかおかしかつた氣がする。
あの目は知つている。里香が俺に向けていた目だ。そう、何かを恐
がつてゐる瞳の色…… ただ、それにはおじさん自体を見てい
た気がしない。自分で言つていてさつぱりわからなくなつてきたが
理恵はおじさんを見てはいたのだが見てはいなかつた。なぜだろう
？ 何故か漠然とした不安みたいなものを感じる。

なんとなくだが……俺は友人一人と話をしたくなつた。携帯を取り出しますは今頃暇であろう大輔のほうへ……

夢を見た。それは双子たちと一緒にキャンプに行つた日の夜のことだつたと記憶している。だが、そこにいるのは俺と母さんだけだ。

「ほり、辰也……水面に満月が反射して綺麗よ」

「うわ～ほんとうだ～」

「ふふ、まるで双子みたいよね？」

「双子？ 理恵ちゃんと里香ちゃんみたいなの？ そういうえばお空の月様と水のお月様……一緒にね！」

「けどね、違うのよ。まったく同じなんてないもの……ほり、こ

うやつて石を湖に投げ込むと……」

「あ、ぐにゃぐにゃになつた！」

「きっと、お母さんが石を投げたから怒つてるのよ。怒りっぽい理恵ちゃんみたいね」

「そうだね……だけれど、それならお空の里香ちゃんは……？」

「見てなさいよ～……えいっ……」

「歪まないね？」

「ええ、里香ちゃんはしつかりしていて石を投げても怒らないわね」「す～いよね～僕だったら泣こちやうよ！ この水面の凹つてなんていつの～？」

「湖面に映つているから湖面月でどうかしら～似て非なる双子つてことを覚えておいてね」

もう母さんの顔を思い出すこともあんまり……ない。十年といふ俺にとっては長すぎた年月が心の傷を癒してくれた。ただ、古傷はたまに痛むのかもしれない。ただ、夢の中の母さんと俺は双子のことで笑いあつていた。

「…………母さん」

夜中、目を覚まして自分の頬が濡れていることに俺は気がついた。
どうやら、懐かしかつたんで涙を流していたらしい。

「？」

ふと、誰かが近くに立っているような気がして俺はそこを見た。

勿論、そこには誰もいない。

もしかしたら、母さんが近くにいてくれたかもしれないなど俺は
思った。

第九話・湖面月（前書き）

さて、そろそろ辰也編も終了が間近となつてきました。わんちゃんさんみてますか！それと、これまで読んでくださつた方……あります。さて、一つ前の前書きで皆さんに言つていたことをおぼえているでしょうか？あの後、悲しいことに一人も……一人もメッセージを……うつ、くれる方がいませんでした！ま、まあ、それはさておき、今回で第九話！泣いても笑つても、予定では次で先ほども言つたとおり辰也編は終了です！感想なんかくれると非常にありがたいんですけど……あ、それともう一つ……これは作者様に向けてのことですが、このことはあとがきのほうで詳しく聞きたいと思います。

九、

どんな過去でもそれは変えられない
決定していない未来は変えられる

湖面に映った月を歪めるのを決めるのは……

『じゃ、辰也……今日はお前の言つとおつじてくぜ。』

「ああ、よろしく頼む……悪いな、面倒かけやせ。」

『気にするな、徹にはきちんと言つてやるんだろ。』

「ああ、徹のほうにも言つておいた……杞憂で済むといいんだけどな」

『やうだらうな、まあ、俺はお前の頼みだから聞いているかい。それに今日はお前の両親の命日だからなー学校にはきちんと言つてやるんだろ?』

「勿論」

『そうか、じゃ、気をつけて行つて来いよ』

「ああ」

俺は電話を切つて学園に袖を通す。別に学校に行くわけではない。行くべき場所は両親の墓標だ。父が母を殺して自殺した。考えてみれば同じお墓にはいつていることはおかしいことなのではないのだろうか?母方の父さん母さんであるじーちゃんばあちゃんは娘を殺した男と同じ場所に自分の娘を入れたことになる。

「…………」

俺が別にことやかく言ひ「」ではないのかもしない。息子ではあるのだが、父さん母さんのことについて詳しへ知つてているわけではないのだ。

「辰也、いべや」

「あ、うん」

じーちゃんに玄関のほうで呼ばれ、俺は急いで支度を終えて後を追つた。

両親の墓標がある場所は近くの寺…………ではなく、結構遠い場所で隣の県だ。きっと、家に帰つたのは夜遅く、悪くて一日ほどかかるに違いない。

交通手段は電車、バス、電車、徒步といったところか？

電車内、俺はばあちゃんの隣に座つて考えていた。

「どうかしたのかい？」

「ん？」「いや…………」

朝唐突に考えたことを危うく口走ろうとするのを飲み込む。

「何か言いたげみたいだけ…………当ててやろうか？」

にやりとした表情をばあちゃんがしたときは確実に答えを当てるときの予兆であるということを俺は知っていた。

「何故、自分の娘を殺した男と同じ墓に娘をいれるんだろうか…………そんなところだらう？」

今回も、ばあちゃんは確実に狙つてきた。

「そうだよ…………」

考えてみれば誰だつてそう思つたのだろうから別に難しいことではないのかもしれない。そこで、それまで黙つていたじーちゃんが話に加わってきた。

「辰也、物事には何らかの理由が必ずあるものぞ…………だから、その理由を知りたいと思ったときはそれなりの覚悟がいる。知らないことを知るということは知らないということを犠牲にするつてことなんだからな」

ちょっと難しいことを言つてすることは明らかだった。成績が芳しくない俺には若干難しい。

黙つていると今度はばあちゃんが口を開く。

「…………知りたいかい？」

「いいや…………やめとく」

それを知つてしまつと何か変わつてしまつ…………いや、壊れてし
まう氣がしたから俺は聞くのをやめた。

「そつかい、知りたくないつたらいつでも聞きにおいでのまあ、

期限があるけどね」

なんともまあ、この話題は期間限定だつたのかと思つてそれは何
故かと思つてたずねてみると……

「私らが死ぬ前に聞かないとね。死人はしゃべらないからね
なにか意味深な顔をしたばあちゃんだつたのだが…………それ以前
にばあちゃんじーちゃんはそれこそ、殺しても死にそうにない気が
するの俺だけだらうか？」

墓の前にいるのは俺たちだけで、どうやら親族たちは既に終わら
せているようだつた。まあ、母方の両親であるじーちゃんばーちゃん
に会わせる顔がないことぐらい、ここ数年のことと俺は既にそれ
を知つていた。大抵、俺たちが来たときには既にお墓が綺麗にされ
ており、お供え物がされている。だが、唯一父さんの家系で俺たち
と顔を合わせているのは……

「やあ、辰也君」

「おじさん…………」んにちは」

おじさんだ。去年ぐらいからだらうか？たまにおじさんを見かけ
るようになつたのは。おじさんはまだ独身で、このお墓参りにもし
たがつて一人でやつてきている。

そこで、世間話に花を咲かせている三人を放つておいて俺はお墓
のところをうろつりすることにした。うろつりしないほうが絶対に
いいだらうが……

「ん？」

気がついてみれば毎年毎年ここにはやつてきているのだがおかし
なことにこの靈園のことを俺は殆ど知らなかつた。まあ、そんなも
のかもしけないんだが……

「あれ？」

墓の影に見知った人影を見た気がした。それも、一人……

「理恵、里香…………」

「辰也…………」

「辰也君…………」

二人とも片手に花束を持つていて、もう片方はしつかりとお互い手を握り締めあつてている。きっと、お墓参りに来ていたのだひつ、偶然。では、だれの？

たゞねようとしたら理恵はそれを察知したのか俺から皿をそらす。

「行くわよ、里香」

「え、あ、うん」

理恵はそのまま俺を素通りしてしまった。里香も同じようにして通つていき、世間話の花畠となつてはいるところへ向かつたところまで確認すると俺はその場を後にした。

綺麗な湖面がお墓の近くにあるのは珍しいことなんだろうか？俺はいまだに世間話をしているであろう二人を放つておいて湖を眺めていた。時折、小さな魚が動いている姿を確認できるし、ここには何か来た人を元気にさせる何かがあるのかもしれない。観光旅行の穴場にしたらしいかもしない。

「辰也」

「辰也君」

「ん？」

気がつけば、右と左に双子が来ていた。

「何ぼーっとしてるのよ？」

「いや、ちよつどい…………観光名所にしたらよみがうだなつて思つてや」

俺がそういうと二人ともはあ？つて顔になる。

「辰也君、ここ、靈園だよ？」

おずおずといった調子でそういう里香に俺は当たり前である」とを思い出した。

「あ…………そ、うだつたな」

墓地の中を通ってわざわざわざいに来たいと思う人がどれほどいるのだろうか？

「辰也、帰るぞ！」

じーちゃんの声が聞こえてきた。俺は双子に向かうことになる。

「…………一人とも、たまには俺の部屋に遊びに来いよ。お茶ぐらになら出せるからさ」

「「……」」

きっと、今の一人は物凄く驚いた顔をしているのだ。俺は振り返つてみたくなつた。

「…………まあ、来たくないんだつたらこなくていいけどな」

「そんなこと言つて……お茶が切れても文句言わないでよ？」

挑発的な声が後ろから聞こえてくる。

「お菓子、持つて行くね？」

素直に嬉しそうな声が後ろから聞こえてくる。

「ああ、待つてるからな」

俺は軽く右腕を上げるじーちゃんたちのところへ向かったのだった。

第九話・湖面月（後書き）

さて、いかがだったでしょうか？双子と辰也が仲直り……したのはいいのですが、あつさりすぎる！と思つ方もあるかもしれません。その理由は次回にて詳しく述きたいと思つています。前書きで最後に言つていたこと……それは、以前雨月が執筆していた『飛龍とかいてワイバーンと呼ぶ！』の続編を書いてくれる方を探していくまです。書いてもいいよ！という熱意のある方はどうかお願いしたいと思います。その場合はメッセージでお願いしたいと思います。

第十話・終焉（前書き）

さて、今回で終わりになつてしましました。もしかしたら別の話を書くかもしだせんが……まあ、そのときはまた、お願ひします。最後に、一言、できれば、最後に評価をお願いしたいと思います。

十、

これから先の物語
それは嘘かもしれない
幻想かもしれない
だけど、一つだけいえる」と……
元凶の終焉、そして、少年の消滅
それで、終わる

九月十四日、そこは、とあるビジネスホテルの屋上だつた。時刻は深夜十一時を軽く回つており、遠くからは暴走する若者たちを乗せているバイクの音が聞こえてくる。

「…………あの、何で俺をここに呼び出したんですか？」

「一つの影が闇と交じり合つてゐるそ」で、一つの影がそう口走る。

「ああ、ちょっと面白くないなあと思つてね…………」
対して、冷静に答えるのはもう一つの影。心なしか、人間とは思えないような冷淡な表情、声を見せる。

「面白くない?どうこうことですか?」

その答えに意味を見出せないもう一つの影は首をかしげるような仕草を見せた後に何かしゃべつとしたが、それより先に相手が答える。

「あの日…………」

「あの日?」

「そうだよ、あの日だよ…………と答えてからさりげ口を開く。

「あの日、あの場所、僕はいたんだよ…………当事者と申つてもいいね。いいや、犯人。そういうつたつて過言じゃない…………」

「!?」

絶句する一つの影、それに対してその反応を見て嗤つてゐる影。

「…………あの日さ、僕は幸せそつなあの家にやつてきたのさ。そのときはまだ、ね、なんとも思つてなかつた。だけどねえ、急に幸せつて奴が憎くなつた。だからね、普段はあんまりおこらない僕の兄さんを怒らせたんだよ。そのとき僕らの家に代々伝わつてた家宝であるあの刀を兄さんは手入れしてたんだよ。勿論、そこで怒らせたら刺されるのは僕さ。僕が刺されちゃかなわなかつたから兄さんが愛していた女性についての嘘情報を耳元でそつとさせやついていたのさ」

「え！？」

愕然となる一つの影、やはり、それに比例して狂つたように騒いで始める影。

「その顔、その表情！最高だね！…………だけど、世の中はつまくいかない。彼女に向かつていつた兄さんは笑う彼女の手前で止まつちやつたんだ。まったく、いつの間にかあの男、自分で怒りをコントロールできるようになつてたんだね。びっくりしたよ。これも君という存在がいたからかな？」

それを聞いてほつとする影、それに対してもう一つの影は面白くなさそうに鼻を鳴らしたが、歪んだ笑みをしていつた。

「…………僕が体当たりしてやつたんだ。一発だつたよ」

「なー？」

目を見開いた影に対する影、笑うのだろうかと思われたが嗤わずに面白くなさそうに言つた。

「その後、僕は誰にも見られないようにその場を後にすることが出来たよ。何、目撃者だつていたかもしけないけど、僕はその日、その場所が一番安全だつて知つていたからね…………なんでだつて？ふふつ、言つたら面白くないからね」

男は笑うと髪を搔いてさらに言つた。

「…………あの男があの後責任を取つて自殺することとは簡単に予測できたよ。だつて、僕らは兄弟だからね…………责任感の強い男だつた。押して彼女を殺したのは僕だけ、そんな状況、つまり、

簡単に彼女を殺せるような状況にしたのは僕の術中にはまつた自分のせいだつて思うだつと簡単に予測できた。ま、これで恵々しい幸せは潰せたかなつて思つたんだよ。警察は僕を疑つてはいたが証拠を見つけることが出来なかつたよつだね。計画がうまく行き過ぎて恐くなつたよ……だけね……」

すつと男の目が細くなり、青年を睨みつける。

「…………君がいた」

「！？」

言葉も出ない青年に男は続ける。

「…………あのあとわあ、君の小学校の生徒を探して僕の言つことを聞いてもらつたんだ。何、単純な子を選んだつもりだつたんだ。まさか、君の隣の家に住んでいる少女だとは知らなかつた。それを知つた後、信用してもらうには君と一緒に撮つた写真を見せれば充分だつた。あつさり信じてもらえた僕は彼女にこうこつた……さて、なんていつたでしょ？」

いやな笑みを浮かべて、目は既に焦点が合つていない……青年にはそう見えた。

「わからない…………」

「だろうねえ…………ふふ、彼女には『君はいつか絶対にあの子に裏切られる』つてね」

「そんな…………そんなことを小学生が信じつてでも思つのか？ 言葉の意味だつて理解できないだろ？！」

青年はそう答える。

「ああ、僕もはじめはそう思つたんだ。だから、ゆつくり、じつくりと教えてあげた。あの子が両親を裏切つたからあの両親はあんな結末を教えたんだ。あの子と一緒にいたら、君の家族もそうなるつてね…………」

不幸を呼ぶ少年の事実を知り、絶句していた青年だつたが……

……顔を上げる。

「…………殺す」

「その田、その表情…………やつぱり、あの男の息子だね」

青年は男に掴みかかり…………顔面に拳を突き出すがそれを簡単に避けられた上に鳩尾に膝蹴りが入り、緩んだ左手をつかまれて一本背負い…………青年は屋上の端から落ちそうになつた。元から立ち入り禁止になつていて扉には鍵がかけられていた屋上だから飛び降り防止の柵などなかつた。いや、あつたとしてもこの男が柵をどうにかしてどかしていただろ。」

「ははつ…………無様だねえ！ ほら、どうにかしてみなよ…………！」

蹴られ、そのまま右手だけで体重を支えているような状況となつた。青年は上るゝとするが、その右腕の上に男の左足がのせられる。「ぐううう…………」

「ん？ どうだい？ こんな高いところから落ちたら…………どうなるか、わかるよね？」

男を恨めしげに見る青年だつたが…………その後ろあたりで視線が止まる。

「…………？」

「ん？ どうしたんだ…………さやあ…………」

男は急に苦しみだし、足を踏み外して青年と同じ状況となつた。その間に青年は屋上へと上る。そして、右手で全体重を支えている男を見ようとしたのだが…………

青白い、右手が伸びてきた。

「ひつ……」

青年はしつらをついてそれから下がる。そして、その右腕は屋上の端を掴んでくる男の手を…………つかみ、引きずり下ろしたのだった。

「ああああああ…………」

そんな声が聞こえてきて、どしゃりとう音が遅れて聞こえてく

る。

青年はしおりもちをついたまま、壊れたよつに口をパクパクしていた。そして、その青年の耳にある言葉がきこえてきた。

『…………一緒に来る?』

『…………』

何がが迫つてきていたのが青年にもわかつた。

『…………どつちなの?』

また、一歩いからへと近づいてくるのがわかつた。屋上の端……さきほど、男が落ちたところに青白い右手が載つた。

『優柔不断ではあの一人に嫌われるわよ?』

「あ、ああ…………お、俺は…………僕は、まだ、誕生日を祝つてなんかない!僕は、あの一人とこれからもずっと、ずっと、誕生日を祝いたいから…………行かない!行きたくない!…………」

上つてこようとしていた右手は動きを止める。

『…………そう、それなら…………』

右手はひつこみ、青年は安堵したが…………急に後ろから声が聞こえてきた。

『…………オヤスミ、辰せ…………』

青年は急に意識を失つたのだった。

これが夢であるといつのは俺自身がよくわかつていた。

「結局、僕、幼い辰也…………といつ存在はなんだったんだろうね?あの日から僕は狂つていたのかな?」

『さあな、だけどさ、お前がいなくちゃ、今の俺はいなかつた。悪いのはあいつでもなかつたということだわつよ…………』

「…………そうだね、だけど、僕は母さんについていくよ。あまりにもかわいそうだ。あれが何なのか…………ま、明日の朝起きたら全部

消えちゃうさ。それより、あの人気が言つたこと、全部は理解できなかつたけどさ、僕らは助かつた。それだけでいいんじゃないのかな？」

『「そうだらうか……』』

「ま、僕は疑問が一つあるよ……きっとまだ君はわからないんじやないかな？」

『「……なんだ？」』

「最後だから、僕の意見は言えないけどね……幽霊ついているのかな？」

『「さあな』』

その返事に対しても、相手は返事をもう、してくれなかつた。

九月十五日、俺は寝ぼけっていたので慌てて学校に行くと教室中は近くのビジネスホテルから飛び降り自殺があつたという話で持ちきりだつた。

「お、珍しいな、君が遅刻なんて……」

徹がいつものように俺に近寄つてきた。俺はそれに対して右腕のみをあげて返事を返し、話のほうにくいついた。

「なあ、自殺つてどういうことだ？」

大策が今度は口を開く。

「ああ、それか……それがちょっと変な話だからきつと話題になつてゐるんだらう。まあ、普通だつたらここまで大騒ぎにならないだらうからな……ちょうど、その時間帯は下のほうで暴走族の集会みたいなのがあつてたそうなんだ。それで、警察がそこに来てたら上から男性が落ちてきた……それはそこにいた全員、……のべ、三十人近く全員がわかつてゐるんだが、中にはすさまじい形相をした女性と一緒に落ちてきたといった人がいるんだ……だけどな、どしゃつという音が聞こえると、男は消えちまつたそうだ」

「消えただあ？ なんだ、それ？」

俺は首を傾げるしかなかつた。だつてそつだろ？ そんなに大人数

が見ている前で消えるなんておかしそうだ。

「どこのどいつのほら話だよ？」

「やつらが今度は徹が言つ。

「ほら話ではないよ、中にはこのビジネスホテルで以前に自殺した女性がこの男性を連れて行つたとか、この男に恨みがあつたからころした」とかそういうた適当なことを言つてゐる連中がいるけど、律姉さんが見てたからね」

なるほど、あの人はそういうた嘘はつかない。

「もう、それなら一体全体…………」

口を開こうとする後ろから声が聞こえた。

「おはよう、辰也

「おはよう、辰也君」

「あ、里香と理恵か…………おはよう」

俺がそういうと徹と大策はおかしそうな顔をした。

「ん？ 何そんな顔してるの？」

理恵が一人にそういうがその一人は俺のほうを見る。

「終わつたんだ、何もかも」

「終わつた？ ふうん、そうかい」

「終わつた？ ああ、ご愁傷様つてことか？」

徹はやはり一発で理解し、大策はやはり一発では理解していよいうだつた。

「あ、それよりさ、辰也…………こんじか、水族館いかない？」

「水族館？」

「うん、今度の土曜日の午後から…………どうかな？ あ、勿論他の二人も誘うから」

その後、俺たちは水族館に行く準備の話をしていたのだった。他愛もない、どこにでもいそうな高校生の会話…………俺にとっては新鮮なものに感じられた気がした。

九月十四日、とあるビジネスホテルの屋上に行くと男性の声と青

年の声が聞こえて来るやつだ。内容はどれもおかしいことや、よく理解できないものにとつては気味悪がつてその場所から去つてしまつ。だが、その内容を知つてある人物がその場所に行くことがあれば、ある事件は解決するだろ?……。

裏切つて、とある青年との信頼を回復するまで少女の道は長かつた。彼女にはずっと、ある女性が見えていた。その女性は宙に浮き、青白かつた。

『あの子をずっと、見ていてね』

九月十四日、そんな夢を見た少女は涙を流しながら心に誓つたのだった。彼女の妹とともに……

エピローグ、

水族館、ちょっと疲れていたので俺はベンチに座つてばらばらに行動している連中を探すのにいい加減飽きてきていた。

「はあ……高校生にもなつてみんなばらばらで行動するつてどうよ」

エイがみたい!サメがみたい!イルカがみたい!鰐がみたい!と言つてここについて自己中心的に動いている連中がむかつくのはなぜだらう?

考え込んでいる俺の視界が急に暗くなる。

「だうれだつ……!」

「……馬鹿かお前、この声は理恵だろ?」「

手を振りほどいて後ろを見るとやはり、理恵だった。

「ばれたか……」

「ばればれだつつうの……それより、エイはもう見飽きたのか?」

「ん~ここに新種の水陸動物を発見したからそつちを見よつかと思つてね」

「……」

「あのや、辰也…………」

隣に座つて理恵は言った。

「…………幽霊つて信じる?」

それに対して、俺は何かを思い出しきつになつたのだが……

思い出せなかつたのでこいついた。

「ああ、いるんぢやないか?」

「うんー…そうだよね!…」

「?」

俺の腕を取つて嗤いかけてくる理恵。「うつむ、何がなんだかさつぱりわからないうが…………放つておくことにしよう。

「それより、そろそろ皆を探しに行くぞ。帰りの電車に間に合わなくなる」

「うん」

「お?」

「ほり、行こいつ?」

その笑顔がいつか見た笑顔だったような気がするのは気のせいかもしれない。だが、俺はその笑顔を見れて何故か、ほつとした。

～END～

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n2569e/>

湖面月～裏切りの黒、信頼の白～

2010年10月8日15時32分発行